

三島鴨神社境内の「表忠碑」について

和田 健（唐崎在住）

表には表忠碑 安正書 とあり、
裏面は次のように刻まれています。

是表郷人死干 王事者之忠也古人曰非忠
無国緩急之日非有此入其能国乎今也 皇
謨恢廓雍化維熙忠魂疑薄精華自見豈可不
知其所由乎是此碑所以建也帝国軍入会三
箇牧村分会所建非惟表忠己実以励忠後之
継今者莫讓美於前入

大正八年九月

正五位藤沢南岳撰分 男元謹書



碑文は大変難しいのですが、何とか読み下してみますと次のように解釈出来そうです。

この碑は郷人でお国のために死んだ者の忠誠心を表すものである。古人も言っておられる。即ち、人民に忠誠心が無かったら国は滅びて仕舞うだろう。国の大事に際して忠誠の人が居なかったら、どうして存続することが出来ようかと。今日、国運が隆昌に向かい発展しているのはこれらの人達の忠誠心の凝り固まった精華が自然に現れたものであって、決して理由のないことではない。そのことを言わんがためにこの碑を建てるのである。帝国在郷軍人会三箇牧村分会がこの碑を建てるのは、先輩の忠誠心を顕彰するだけでなく、後の方々にも先輩に負けられないようにして貰いたいがためである。

大正八年九月、正五位藤沢南岳がこの碑文を撰び、息子の元が謹書します。

こういう風に見てきますと、この碑は、特に戦没者の忠魂を讃えたというものでなく、一般の忠誠心、狭い意味でならば地域住民の郷土愛を訴えられたものと受け止めても宜しいのではないのでしょうか。

ところで、大正八年という時機にどうしてこの表忠碑が建てられたのか。その理由については当時の在郷軍入会の幹部であった松村亀次郎氏(唐崎)や葉間博太郎氏(柱本)が既に亡き今日質す術もありませんが、表の題字を揮毫されている福島安正というような当時有名な将軍や、大阪の高名な学者藤沢南岳先生がこの表忠碑にかかわりがあったことについて、私どもは郷土の先輩の方々の実力の程を思い知らされる次第です。

因みに

福島安正は嘉永（一八五二）生まれ。

明治二十年（一八八七）ドイツ公使館付武官（歩兵少佐）

二十五年二月十一日 ベルリン出発、単騎欧亜大陸横断。

二十六年六月 帰朝、上野公園にて官民大歓迎会。

三十三年六月 義和団事件勃発に付臨時清国派遣軍司令官。

三十六年十月 参謀本部次長。

大正元年（一九一二）関東都督（中将）

三年九月 大将に昇進、予備役編入。

八年二月死去。

藤沢南岳は天保十三年（一八四二）讃岐国に生まれる。

維新に際し高松藩は朝敵となったが、南岳の働きにより藩論を恭順に導き、赦される。後、藩学講道館の督学となる。更に父の跡を継ぎ、浪華の塾「泊園書院」を主宰する。

大正九年（一九二〇）一月 死去。